

在留外国人と言語 (第9講)

文化の違い


この講座で学ぶこと

- ▶ 文化スタイルについて概要を知る。
- ▶ 世界には様々な文化があり、在留外国人もそれらの文化を背景にしていることを理解する。
- ▶ 食文化の違い（例えば、イスラム教の子どもが来て、豚肉が食べられないというケースを想定して、どのように対処するかなど）を検討する。あるいは、女性のかぶるベールなど、衣服の習慣なども理解して、日本社会がどのように受け入れるか学ぶ。

文化スタイル（西洋文化とイスラム文化）

- ▶ 『文明の衝突』 サミュエル・ハンチントン
- ▶ *The CLASH OF CIVILIZATIONS AND THE REMAKING OF THE WORLD ORDER*
- ▶ 冷戦期において脅威とされていた共産主義勢力の次に出現した新たな世界秩序において、最も深刻な脅威は主要文明の相互作用によって引き起こされる文明の衝突であることを説明している。
- ▶ 東洋文明と西洋文明の対立がよく言われたが、現代では、西洋文化とイスラム文化の対立がよく目立っている。

西洋先進国で増大する移民

- ▶ 旧植民地から移民してくる人が多い。
- ▶ イギリス： アフリカの旧植民地
- ▶ フランス： アフリカの旧植民地（アルジェリア、モロッコ、チャドなどのフランス語圏→移住の時のことばの壁が少ない）
- ▶ アメリカ： メキシコをはじめとする中南米諸国からの移住者が多い。
- ▶ ドイツ： 難民を広く受け入れている。
- ▶ しかし、近年、EUでは、難民を支えきれなくなっており、受け入れへの態度も硬化している。

イスラム教徒

信仰告白 <small>こくはく</small>	礼拝 <small>れいはい</small>	喜捨 <small>きしゃ</small>	断食 <small>だんじき</small>	巡礼 <small>じゆんれい</small>
「アッラーの他に神はなし。ムハンマドはその使徒」	日に5回、祈りを捧げること	自分の財産を貧しい人にほどく	1年に1カ月、日中の飲食を断つ	一生に一度メッカに巡礼する
				

女性の服装

イスラム教徒の女性の衣装



ブルカ

- ▶ 全身を覆うベール
伝統的にアフガニスタンのパシュトゥン人が着用
- ▶ 頭と体を覆い、目元は網状になっている
- ▶ 旧支配勢力タリバンが着用を強制



ニカブ

- ▶ 口や鼻を含めて全身を覆うベール
- ▶ 目の部分がわずかに開いている
- ▶ ワッハーブ派の影響で都市部を中心に普及



ヘジャブ


- ▶ ヘッドスカーフ
- ▶ 髪と耳、首を覆うが、顔は見える
- ▶ エジプトのムスリム同胞団を筆頭にイスラム世界で広く使用されている



チャドル

- ▶ イランやアフガニスタンで着用される伝統衣装
- ▶ 髪と全身を覆うマント前が開いている
- ▶ 着用は強制されていない

西洋社会における、移民の増大

- ▶ 西洋社会は、伝統的に移民の受け入れに積極的であった。
- ▶ しかし、近年では、以下の理由により消極的になってきた。
- ▶ (1) 受け入れによる社会的なコストが増加している。
- ▶ (2) 職を見つけられない移民達が犯罪に走る。
- ▶ (3) 住居の逼迫により、住宅事情が悪化している。

- ▶ ただし、言語的には、西洋諸国の植民地であった理由で、英語やフランス語が得意な移民が多い。また、西洋言語はアルファベットを用いるので、書き言葉も比較的習得しやすい。

アイデンティティ (identity)

- ▶ 自己同一性（アイデンティティ、identity）とは、心理学（発達心理学）や社会学において、「自分は何者なのか」という概念をさす。

アイデンティティもしくは同一性とだけ言われる事もある。

当初は「自我同一性」（じがどういつせい、英: ego identity）と言われていたが、後に「自己同一性」とも言われるようになった。エリック・エリクソンによる言葉で、青年期の発達課題である。

移民達はアイデンティティ危機に面することがある。

同一性拡散の問題

- ▶ 自我同一性がうまく達成されないと、「自分が何者なのか、何をしたいのかわからない」という同一性拡散の危機に陥る。
- ▶ 同一性拡散の表れとして、エリクソンは、対人的かかわりの失調（対人不安）、否定的同一性の選択（非行）、選択の回避と麻痺（アパシー）などをあげている。
- ▶ またこの時期は精神病や神経症が発症する頃として知られており、同一性拡散の結果として、これらの病理が表面に出てくる事もある。

移民の若者達の葛藤

- ▶ 母国から西洋諸国に移住したが、文化があまりに異なるので、戸惑いを感じている。
- ▶ イスラム教の信者達は、キリスト教が普及している西洋社会での溶け込みに苦労している。また、受け入れ先の社会も受け入れに苦労している。
- ▶ 教会やシナゴークへの破壊行為が報告されることもある。

高コンテクストと低コンテクスト

- ▶ “高コンテクスト”とは、実際に言葉として表現された内容よりも、言外の意味を察して理解するコミュニケーションの取り方を指す。
- ▶ 言わば「空気を読む」言語文化で、極端な例は我らの話す日本語だと言われている。
- ▶ “低コンテクスト”とはその逆で、言葉にした内容のみが情報として伝わるコミュニケーションである。
- ▶ ヨーロッパのように様々な民族がまざりあう文化では、ことばを通してのみコミュニケーションが図られる。
- ▶ 日本のような察しの文化では、言外の気持を察することが要求される。
- ▶ これからのグローバル化の時代では、低コンテクスト文化に適応した態度が必要とされる。



低コンテキスト文化では

- ▶ 低コンテキスト文化では、相手を説得するのは、論理的な明快さ、が必要である。
- ▶ 教育の場では、小学生の頃から、人々の前で話すこと、論理的な話しができることが訓練される。



日本における移民達の文化

- ▶ 日本人同士では暗黙の了解とされたことが、外国人には、言葉ではっきりと明示的に伝える必要がある。
- ▶ イスラム教徒では、日本式の火葬を好まない。土葬を願っている。
- ▶ イスラム教は、日本のレストランでは、豚肉が提供されるので、食事することが難しい。ハラール認証された肉類しか食べることができない。
- ▶ ベジタリアンがいるので、特に観光客の中にはそれらの傾向が見られる。

ハラール

- ▶ ハラール (Halal) とは、「許されているもの」という意味である。イスラム教徒の間で大切にされている考え方で、生活において合法的なものがハラールとされている。
- ▶ 一方で、非合法とするものはハラームと呼ばれ、神より禁じられている行為だとされている。イスラム教徒は、食事や服装から普段の行いまで、生活のすべてを「ハラールかハラームか」で判断している。
- ▶ 神の教えに背く行動を避けるため、イスラム教徒は基本的にハラールに対応した店しか選ばない。そのため、イスラム教徒を迎え入れたい飲食店は、ハラール食への理解と対応が必要である。

課題

- ▶ 世界に多発する民族問題と言語の事例を収集する。
- ▶ とりわけ多文化社会がどのように対処してきたか、自分事として考える。
- ▶ 近所にハラール対応のレストランがあるか調べてみよう。

